

学校への適応を媒介する要因としての 児童・生徒間関係

石田靖彦

学校教育講座 (心理学)

Interpersonal relationships as mediators of school adjustment

Yasuhiko ISHIDA

Department of School Education (Psychology), Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

学校への適応とは

学校への適応 (adjustment to school/school adjustment) という概念は、日常でも使われるほど一般的な用語であり、その定義はきわめて広くあいまいである。そもそも「適応」という概念は、生物学の分野で使われはじめた概念で、「生存のために環境に応じて生物体の生理的・形態的な特質が変化すること」と定義されている。この定義から派生して一般的には、「ある状況に合うこと。また、環境に合うように行動のし方や考え方を变えること」として使われている。いずれにしても、環境と個体が適合しているかどうか、環境が個体に対して課す課題や要請をどう対処するかというのが適応の本来の意味といえる。

学校への適応についても、このような環境と個体との適合という観点から捉えることが可能である。学校という環境が個体である児童・生徒に課す課題や要請はさまざまあるが、たとえば一生懸命勉強すること、学習意欲を高め学力を身につけること、友だちと仲良くして協調性や社会性を身につけることなどが挙げられるだろう。この観点から考えると、これらの課題や要請に児童・生徒がどのように対処しどの程度達成しているかということが、彼らの学校への適応の指標となる。

他方、学校への適応を個体の側から捉える立場も存在する (心理学的適応感 Psychological adjustment)。環境と個体が適合していないという状態は、個体に対してさまざまなネガティブな反応を引き起こすと考えられる。たとえば、高い学業達成が要求される状況において、それを達成できない児童・生徒は無力感や劣等感を感じるだろうし、学習意欲をさらに低下させるかもしれない。またみんなと仲良くすることや多くの友人を作れることが求められる状況では、友人を形成できずに孤立してしまう児童・生徒は級友に対する満足感が低く、孤立感や孤独感を感じるだろう。

このような児童・生徒の心理的状态から学校への適応を捉えようとする立場は、多くの質問紙検査に共通するものである。わが国でよく用いられている「学級適応診断検査 (SMT; 大西・松山, 1967)」も、児童・生徒の心理的状态をスクール・モラルという観点から測定したものと見える。スクール・モラルとは、「学校の集団生活ないし諸活動に対する帰属度、満足度、依存度などを要因とする児童・生徒の個人的、主観的な心理状態 (松山・倉智, 1969)」,あるいは「学校や学級集団における満足感や安定感を基礎とした諸活動に対する児童・生徒の積極的で意欲的な心的態度 (松山, 1979)」と定義され、学校への適応の程度を示す概念と考えられている (松山・倉智, 1969)。またアメリカでしばしば用いられる「学校生活満足度尺度 (Quality of School Life Scale ; Epstein, McPartland, 1976)」も、学校での満足感や学校での活動の意味づけといった主観的な感情や意味づけから学校への適応を捉えたものである。

このような心理的な状態としての学校への適応感を構成する要素にはさまざまなものが考えられるが、先述した「学級診断検査」では、「学校への関心 (帰属意識)」「級友との関係」「学習への意欲」「教師への態度」「テストへの適応」が挙げられている。また「学校生活満足度尺度」は、「学校全体に対する満足感」「学業に対する積極的関与」「教師に対する態度」で構成されている。学校での課題や要請をどのように捉えるかによって多少の違いがあるものの、学校全体に対する態度や感情、教師や級友との対人関係、勉強や学業に対する態度や感情といった要素が学校への心理的な適応を構成する主要な要素といえるだろう。

学校移行事態における適応

学校の移行事態は、小学校への入学から始まって小学校から中学校、中学校から高校、大学など一生のうちで幾度か経験するが、なかでも小学校から中学校へ

の進学は身体的に大きな変化が生じる時期と重なっており、児童・生徒に大きな負担となることが指摘されている (Eccles & Midgley, 1989; 小泉, 1992; Simmons, & Blyth, 1987)。

たとえば名城・石川・嘉数 (1986) は、中学校入学に対する期待や不安を調査し、小学校6年生は中学校での教師や級友との関係や学習の難しさなどに高い不安を感じていることを報告している。福武書店教育研究所の調査結果 (1990) では、中学校進学を期待する児童が約半数 (45.9%) いるものの、希望しない児童が過半数を占め、その理由として勉強の難しさや現在の友人との別れ、規則や上下関係の厳しさなどを挙げている。さらに中学生を対象としたストレス研究では、「教師との関係」「友人関係」「部活動」「学業」が中学生の主要なストレス源となっていることが報告されている (岡安・嶋田・丹羽・森・矢富, 1992; 岡安・嶋田・坂野, 1993)。これらの研究は、中学校入学に際して多くの児童・生徒が教師や級友との対人関係や学業に対して高い不安を感じていることを示すと同時に、中学進学後もこれらの事柄が強いストレスとなっていることを示している。

では、対人関係や学業に対する態度は、中学校入学前後でどのように変化するのだろうか。Eccles, Midgley, & Adler (1984) は、学習活動への動機づけや学習活動に関する自己評価が発達的にどのように推移するかについてレビューを行い、学校や学習に対する態度や学業に関連したコンピテンスは高校生まで学年が上がるにつれて低下すること、またこの低下は小学校入学時と中学校進学時に顕著に認められることを指摘している。中学校進学時に学業に対する態度や自己評価が低下するという知見は、6年一貫校と8年一貫校における6年から7年への発達的变化を比較した研究でも示されており、とくに女子の自己評価の低下が顕著であることが示されている (Simmons, & Blyth, 1987)。

本邦では耳塚・荻谷・濱名・庄 (1982) が、小学校6年生から中学3年生までの授業の理解度や教師との関係について検討し、中学校進学に際して学級に対する満足感が急激に低下すること、教師との関係は進学直後からすぐに悪化するわけではないが、授業の理解度や成績が低下するにつれ教師との関係も悪化することを報告している。学業への関心が中学校入学後し

ばらくしてから低下することは、古川・小泉・浅川 (1992) でも指摘されている。

このような中学校進学にともなう学業に対する意欲、および学業に関連した自己評価の低下には、小学校と中学校の学習環境の違いが関連していると考えられている (Eccles, Midgley, 1989; Eccles, Midgley, & Adler, 1984; Harter, Whitesell, Kowalski, 1992)。中学校は小学校にくらべて課題が複雑で難しくなるとともに、成績や能力がより重視され生徒間の比較や競争が促進される。また小学校から中学校では対人環境も大きく変化し、小学校で形成された友人と交流する機会は減少し、学級担任制から教科担任制への移行によって教師とも個別で親密な関係が築きにくくなる。このような課題や評価、対人環境の変化は、自分の成績や能力に対する懸念を増大させるとともに統制感や知的な好奇心を減退させ、学校や学業に対する態度にネガティブな影響を及ぼすと考えられる。とくにこの傾向は、能力が高くない生徒や自分の能力を高く見えない生徒に顕著であることが指摘されており、このような学校や学業への関心の低下をどのように食い止めるかが問題となっている (Eccles, Midgley, 1989; Eccles, Midgley, & Adler, 1984)。

ところで上記の研究は、学校移行事態での学業領域の変化に関するものであるが、先述したように学校への適応という概念は、学業に対する取り組みや態度だけでなく、教師との関係や級友との関係などを含む幅広い概念である。またそれを捉える視点も学校が児童・生徒に課す課題や要請といった環境側からの視点だけでなく、学校に対する満足感や意味づけなど主観的、主体的な視点も含まれる。しかしながら、学校への適応に関する研究の多くは、学業に対する態度や学業達成、学業コンピテンスといった学業に関連したものが多く、それ以外の要因については十分検討されてこなかった (Birch & Ladd, 1996)。学校移行事態は、それまでに形成された友人との交流が困難になり新たな関係を形成することが迫られる事態である。したがって、この時期にどのような関係を形成できるかが、その後の対人面や学業面での適応に大きな影響を及ぼすことは想像に難くない。

Birch & Ladd (1996) は、これまでの適応の概念が学業関連に限定されていたことを指摘した上で、学校への適応過程を包括的に捉える枠組みとして Figure

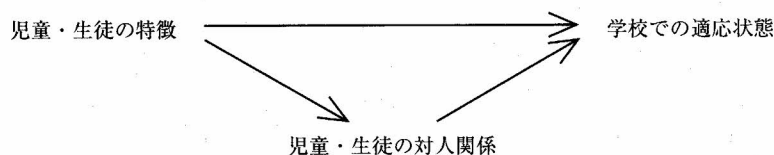


Figure 1 学校への適応過程における対人関係の媒介モデル

1のモデルを提唱している。このモデルでは、児童・生徒の特徴が学校への適応に直接的な影響を及ぼすことを仮定しているだけでなく、両親や教師、級友との関係などの対人関係が、児童・生徒の特徴と適応状態とを媒介する間接的な要因として捉えられているところに特徴がある。ただしBirchらは、学校への適応過程を包括的に捉える枠組みを示したのみで、それぞれの要因がどのようなプロセスを経て他の要因に関連するのか、その影響過程については明確には示していない。

そこで本稿では、児童・生徒の級友との関係に焦点を絞り、級友との関係が学校への適応に及ぼす影響、また級友との関係に影響を及ぼす諸要因について検討を加える。

学校への適応を媒介する要因としての児童・生徒間関係

ひとくちに児童・生徒の対人関係といっても、その特徴や機能についてはさまざま捉え方が可能である。たとえばHartupら(Hartup, 1995; Hartup & Stevens, 1997)は、生涯発達における友人関係の意義を検討するうえで、「友人をもつこと」「友人の特徴」「友人関係の質」を区別する必要性を指摘した。またBerndtら(Berndt & Keefe, 1996; Berndt, 1999, 2002)は、友人や仲間からの影響過程として、友人や仲間の特徴の効果と友人関係の質の効果を区別している。本稿ではこれらの指摘を踏まえ、級友との関係の効果と友人や仲間の特徴の効果に分けて考察する。

1. 級友との関係の効果

児童・生徒間の対人関係が学校への適応や発達に及ぼす影響については、これまで2つの異なる領域で研究されてきた。ひとつは級友からの受容や人気の高さ、ソシオメトリック地位など、学級内の相対的地位に注目した研究で、もうひとつは二者関係を中心とした親密な友人関係やそこでの相互作用を検討した研究である。

人気や受容が学校への適応に及ぼす影響については、主にソシオメトリック・テストやゲスファー・テストを用いて検討されてきた。これらの研究では、人気や受容の程度が高い児童・生徒は、そうでない児童・生徒にくらべて学習意欲や学業成績が高いこと(Austin & Draper, 1984; DeRosier, Kupersmidt, Patterson, 1994)、また人気や受容が高い児童は孤独感が低く、とくに仲間から拒否された児童・生徒は孤独感が高いことが示されている(Asher, Parkhurst, Hymel, Williams, 1990)。さらにこのような児童期の人気や受容の程度は、その後の適応や発達にも影響を及ぼすことが明らかにされている(Kupersmidt, Coie, & Dodge, 1990)。

他方、友人関係が学校への適応や発達に及ぼす影響については、さまざまな研究で指摘されている。Newcomb & Bagwell (1995)は、友人関係を測定した1933年から1993までの82論文をメタ分析にかけ、友人関係の特徴を明らかにするとともに、親密な友人関係をもっている児童・生徒はもっていない児童・生徒にくらべて自信が高く孤独感が低いなど精神的に健康であることを指摘した。また学校や学業に関しても、親密な友人関係をもっている児童・生徒は学業成績が高く、親密な友人関係は学業への取り組みを高めたり、学校への適応を促進することが指摘されている(Berndt & Keefe, 1995, 1996; Wentzel & Caldwell, 1997)。

以上のように、集団を単位とした人気や受容と二者関係を基盤とした友人関係は、いずれも学業面や対人面での適応や発達にプラスの効果をもたらすことが示されている。ただしこれら2つの指標は、測定している概念や先行要因、さらにその効果が多少異なることが指摘されており、厳密には区別する必要がある(Bukowski & Hoza, 1989; Newcomb & Bagwell, 1995)。

第一に、そもそも人気や受容と友人関係では、分析のレベルや測定しているものが異なることである。人気や受容は、集団の成員から好かれている、受容されているという、集団を基盤とした一方向的な概念であるのに対し、友人関係は親密で相互的な二者関係をもっていることを意味し、相互作用や情緒的な絆を含む双方向的な概念である。

第二に、人気や受容と友人関係ではその先行要因がやや異なることである。人気や受容は、その定義に示されているように、他の集団成員から一方向的に受ける好意の量的な指標のことであり、実際に相互作用がない相手からも好意は受けられる。そのため、人気や受容はその個人が社会的に望ましい行動や特性をどの程度有しているかということに大きく左右される。事実、級友から受容され人気が高い児童・生徒の行動特徴として、援助的で思いやりがあり、ルールを守ることなどが多くの研究で示されている(Coie, Dodge, & Kupersmidt, 1990)。他方、友人関係は好意の相互性や実際の相互作用を伴う両者の「関係」に関する指標である。このような相互的で親密な関係の形成には、相手の社会的望ましさも関連するが、後述するように、自他の類似性も大きな要因となることが指摘されている。

第三に、人気や受容と友人関係では適応や発達に及ぼす影響が多少異なることが挙げられる(Parker & Asher, 1993; Bagwell, Newcomb, & Bukowski, 1998)。Parker & Asher (1993)は、級友からの受容の程度と親密な友人関係が孤独感に及ぼす影響について検討し、級友からの受容が低い児童であっても親密な友人

関係は形成できていること、また級友からの受容の程度と親密な友人関係は孤独感に対してそれぞれ独立に影響していることを明らかにした。また Bukowski Hoza, & Newcomb (1987; Bukowski & Hoza, 1989 より引用) は、親密で相互的な友人関係を有していることと級友からの人気や受容が児童の自己概念に及ぼす影響について検討し、親密な友人関係は自己価値観と強く関連するのに対し、人気の程度は知覚されたコンピテンスと関連していることを明らかにしている。さらに近年では Bagwell, Newcomb, Bukowski (1998) が、前青年期における級友からの人気(拒否)の程度と親友の有無が成人後の社会的な適応に及ぼす影響について検討し、児童期の人気の程度は学業や仕事での成功といった社会的な成功と関連していたのに対し、親友の有無は家族とのかかわりや全体的な自己価値、精神的健康といった私的で内面的な適応と関連することを指摘している。

これらの研究は、人気や受容といった集団内の相対的地位と二者関係を基盤とした友人関係では、心理学的にそれぞれ異なるものを測定しており、適応や発達に及ぼす効果についても区別できることを示しているといえるだろう。

2. 友人や仲間の特徴の効果

人気や受容の程度、あるいは親密な友人関係がもたらす影響に関する研究は多いのに対し、友人や仲間がどのような態度や行動を有しているかという友人や仲間の特徴の効果については、これまでほとんど検討されてこなかった。しかし“朱に染まれば赤くなる”といわれるように、児童・生徒の態度や行動の形成や変容に友人や仲間の特徴が影響を及ぼすことは十分考えられることである。とくに青年期の友人関係は児童期や青年期以降の関係にくらべて親密さが強く、友人や仲間への同調傾向も児童期から青年期前期にかけて増大しその後やや低下することが指摘されている (Rubin, & Bukowski, Parker, 1998), また児童期から青年期前期にかけての友人関係の特徴として、排他的で凝集性の高い仲間集団が形成されやすいことも指摘されている (Brown, 1989)。これらの研究から、児童・生徒は友人や仲間集団から少なからず影響を受けており、とくに青年期はその傾向が強いことが示唆される。

ところで、人気や受容、親密な友人関係は適応や発達に対してプラスの影響を及ぼすのに対し、友人や仲間の特徴については、必ずしもプラスに影響するとは限らないことは注意すべきである。友人や仲間への同調傾向や斉一性への圧力あるいは友人や仲間との同一視は、いずれも自分と友人や仲間との類似性を高める方向に作用する。したがって親密な友人や所属する仲間集団が望ましい特徴を有している場合には、その児

童・生徒の適応も促進されると考えられるが、望ましい特徴を有していない場合には適応を阻害させる可能性が考えられる。

このような友人や仲間集団のネガティブな効果については、非行や問題行動に関する研究でしばしば指摘されてきた (Andrew, 1991; Uberg, Degirmencioglu, & Pilgrim, 1997)。Uberg, Degirmencioglu, & Pilgrim (1997) は、飲酒や喫煙に及ぼす親友や仲間集団の影響を縦断的に検討し、青少年の飲酒や喫煙の開始や量の増大に親友や仲間集団の飲酒や喫煙の程度が影響していることを明らかにした。また Andrew (1991) は、青少年の非行に関して、友人が非行を行っている場合、その友人に対して愛着をもっていない場合には自分は非行を行わないが、愛着をもっている場合には自分も非行を行うようになることを指摘している。

以上の研究は、非行や問題行動といった極端な事例であるが、教師や学校に対する態度や学習への取り組みといった学校での適応場面でもあてはまると考えられる。Berndt & Keefe (1995) は、学級への積極的な取り組みと妨害行為に及ぼす友人や仲間からの影響について検討し、友人や仲間がこれらの行動をどの程度行っているかという友人や仲間の特徴が、学級への積極的な取り組みや学級での妨害行為に影響を及ぼしていることを指摘した。とくに妨害行為では主観だけでなく客観でも認められたことから、妨害行為における友人や仲間の影響は大きいのではないかと考察している。ただし、破壊や妨害行為に加えて孤立や引込み思案といった行動も加えた研究では、友人や仲間からの影響は測定される行動や評定者(主観による評定か他者による評定か)によって異なっており、必ずしも明確な結果は得られていない (Berndt, Hawkins, & Jiao, 1999)。

友人や仲間の特徴の効果については理論的には想定できるものの、研究数が少ないために影響の強さや方向性、また影響されやすい側面や影響されにくい側面などを明らかにするには至っていない (Berndt, 2002)。これらについては、多くの研究を積み重ねることによって明らかにする必要があるといえよう。

級友との関係に影響する諸要因

では、級友との関係形成に関連する要因にはどのようなものがあるだろうか。先述したように人気や受容については、児童・生徒が社会的に望ましい特徴を有しているかどうかによって左右されやすいことが指摘されている。たとえば級友から受容され人気が高い児童・生徒は、援助的で思いやりがあり、ルールを守ることなどが行動的特徴を有することが示されている。また拒否と無視を区別した測定法では、拒否される児童・生徒は攻撃行動やルール違反が多く、無視される児童・生徒は引込み思案の傾向が強いことが示されている

(Coie, Dodge, & Kupersmidt, 1990)。いずれにせよ、相互作用を伴う必要がない一方向的な人気や受容については、これらの望ましい特徴を有しているかどうか重要であるといえよう。

他方、親密な友人関係の形成については、個人の特徴だけでなく相手の特徴や状況要因などさまざまな要因に左右される。とりわけ個人間の要因や状況要因の影響が大きいことが指摘されている。それは親密な友人関係が出会った当初から形成されているわけではなく、自己開示などの情報交換やさまざまなやり取りを通じて徐々に形成されるものであり、双方の自由意志に基づいて維持、発展されるものだからである。言い換えると、友人関係が進展し発展するには関係を継続し進展させようとする双方の合意が必要であり、親密な友人関係の形成と進展はこのような双方の連続した選択過程の結果といえる(今川, 1989)。

このような選択過程にはさまざまな要因が関連するが、なかでも自他の類似性は多くの研究で指摘されてきた。たとえばByrne (1971)の一連の研究は、態度の類似性が対人魅力の規定因となっていることを明らかにした。また実際の友人や仲間集団でも、人口統計学的指標や薬物使用(Kandel, 1978)、学業に対する意欲や学業成績(Ide, Parkerson, Haertel, & Walberg, 1981; Kandel, 1978)、パーソナリティや行動特徴(Duck, 1973; Kupersmidt, DeRosier, & Patterson, 1995)など、さまざまな領域での類似性が指摘されている。

ただし、これらの研究の中には1回きりの調査に基づくものも多く、友人関係の形成過程を縦断的に検討したものは少ない。先述したように、児童・生徒は長期間ともに過ごす中で相互に影響を及ぼしあっており、態度や行動が類似することが指摘されている。つまり、1回きりの調査での類似性には、類似した友人や仲間を選択したという「選択過程」の効果と友人や仲間とともに行動することでお互いが類似するようになるという「社会化過程」の効果が交絡しているのである。この選択の効果と社会化の効果を分離するには少なくとも縦断的な研究手法が必要である。

またパーソナリティの類似性が友人関係の形成や進展に及ぼす影響については、態度や価値観の類似性にくらべて結果が複雑で明確な結果が得られにくいことが指摘されている(Hendrick & Brown, 1971; 中里・井上・田中, 975)。これには2つの理由が考えられる。第一に、価値観や態度は望ましさの基準が比較的あいまいであるのに対し、パーソナリティでは望ましい(好まれやすい)特性と望ましくない(好まれにくい)特性が価値観や態度にくらべて明確であることである。Byrne (1961)は、類似性が対人魅力の規定因となる根拠として、評価の基準があいまいな態度や価値観では、類似した他者の存在が自己の態度や価値観

が妥当であるという合意的妥当性を与えることを指摘している。つまり、社会的に望ましいパーソナリティ特性では、その効果が大きいために類似性をもたらす効果は相対的に減少すると考えられるのである。事実、対人魅力に関する研究では、特性の望ましさと類似性の双方が対人魅力に影響を及ぼすことが確認されている(蘭・小窪, 1978)。

第二に、価値観や態度は対人関係の進展に直接的な影響を及ぼしにくいのに対し、パーソナリティ特性の中には対人関係の進展を促進したり阻害したりするものがある点である。たとえば、友人関係の形成や親密化については、社交性、自己開示特性、対人不安特性、シャイネスなどが関連することが指摘されているが(Hays, 1985; Zimbardo, 1977)、これらの特性では、たとえパーソナリティの類似性に基づいて関係が形成されたとしても、親密化を抑制する特性の場合にはその後の進展が抑制される可能性がある。事実、Taylor (1968)は、自己開示特性が友人関係の親密化に及ぼす影響について縦断的に検討し、自己開示特性が高い者同士は共行動の量が多く急速に親密化するのに対し、自己開示特性が低い者同士では親密しにくいことを明らかにしている。したがって、友人関係の親密化に及ぼすパーソナリティの類似性を検討する際には、その特性がもつ社会的望ましさの程度や親密化を促進/抑制する程度を考慮に入れる必要があるといえよう。

引用文献

- Agnew, R. 1991 The interactive effects of peer variables on delinquency. *Criminology*, **29**, 47-72.
- 蘭千壽・小窪輝吉 1978 魅力形成に及ぼす社会的望ましさの効果 実験社会心理学研究, **18**, 75-81.
- Asher, S. R., Parkhurst, J. T., Hymel, S., & Williams, G. A. 1990 Peer rejection and loneliness in childhood. In S. R. Asher & J. D. Coie (Eds.), *Peer rejection in childhood*. New York: Cambridge University Press. Pp.253-273.
- Austin, A. M. B., & Draper, D. C. 1984 The relationship among peer acceptance, social impact, and academic achievement in middle childhood. *American Educational Research Journal*, **21**, 597-604.
- Bagwell, C. L., Newcomb, A. F., & Bukowski, W. M. 1998 Preadolescent friendship and peer rejection as predictors of adult adjustment. *Child Development*, **69**, 140-153.
- Berndt, T. J. 1999 Friends' influence on students' adjustment to school. *Educational Psychologist*, **34**, 15-28.
- Berndt, T. J. 2002 Friendship quality and social development. *Current directions in Psychological Sciences*, **11**, 7-10.
- Berndt, T., Hawkins, J. A., & Jiao, Z. 1999 influences of friends and friendships on adolescent to junior high school. *Merrill-Palmer Quarterly*, **45**, 13-41.
- Berndt, T. J. & Keefe, K. 1995 Friends' influence on adolescents' adjustment to school. *Child Development*, **66**, 1312-1329.
- Berndt, T. J., & Keefe, K. 1996 Friends' influence on school

- adjustment: A motivational analysis. In J. Juvonen, & Wentzel, K. R. (Eds.), *Social motivation: Understanding children's school adjustment*. New York: Cambridge University Press. Pp.248-278.
- Birch, S. H., & Ladd, G. W. 1996 Interpersonal relationships in the school environment and children's early school adjustment: The role of teachers and peers. In J. Juvonen & K. R. Wentzel (Eds.), *Social motivation: Understanding children's school adjustment*. New York: Cambridge University Press. Pp.199-225.
- Brown, B. B. 1989 The role of peer groups in adolescents' adjustment to secondary school. In T. J. Berndt & G. W. Ladd (Eds.), *Peer relationships in child development*. New York: Wiley. Pp.188-215.
- Bukowski, W. M., & Hoza, B. 1989 Popularity and friendship: Issue in theory measurement, and outcome. In T. J. Berndt & G. W. Ladd (Eds.), *Peer relationships in child development*. New York: Wiley. Pp.15-45.
- Bukowski, W. M., Hoza, B., & Newcomb, A. F. 1987 Friendship, popularity, and the "self" during adolescence. Unpublished manuscript.
- Byrne, D. 1971 *The attraction paradigm*. New York: Academic Press.
- Coie, J. D., Dodge, K. A., & Kupersmidt, J. B. 1990 Peer group behavior and social status. In S. R. Asher & J. D. Coie (Eds.), *Peer rejection in childhood*. New York: Cambridge University Press. Pp. 17-59.
- Duck, S. 1973 Personality, similarity and friendship choices by adolescents. *Journal of Personality*, **41**, 543-558.
- DeRosier, M. E., Kupersmidt, J. B., & Patterson, C., J. 1994 Children's academic and behavioral adjustment as a function of the chronicity and proximity of peer rejection. *Child Development*, **65**, 1799-1813.
- Eccles, J., & Midgley, C. 1989 Stage-environment fit: Developmentally appropriate classrooms for young adolescents. In C. Ames & R. Ames (Eds.), *Research on motivation in education: Vol. 3 Goals and cognitions*. CL: Academic Press.
- Eccles, J., Midgley, C., & Adler, T. E. 1984 Grade-related changes in the school environment: Effects on achievement motivation. In J. G. Nicholls (Ed.), *Advances in motivation and achievement*. Greenwich, CT: JAI. Pp.283-331.
- Epstein, J. L., & McPartland, J. M. 1976 The concept and measurement of quality of school life. *American Educational Research Journal*, **13**, 15-30.
- 福武書店教育研究所 1990 モノグラフ・小学生ノウ Vol.10 6年生白書 福武書店
- Hays, R. B. 1988 Friendship In S. Duck (Ed.), *Handbook of personal relationships*. New York: John Wiley & Sons, Ltd. Pp.391-408.
- Hendrick, C. & Brown, S. R. 1971 Introversions, extroversions, and interpersonal attraction. *Journal of Personality and Social Psychology*, **72**, 592-603.
- Harter, S., Whitesell, N., & Kowalski, P. 1992 Individual differences in the effects of educational transitions on young adolescents' perceptions of competence and motivational orientation. *American Educational Research Journal*, **29**, 777-807.
- Hartup, W. W. 1995 The company they keep: Friendships and their developmental significance. *Child Development*, **67**, 1-13.
- Hartup, W. W., & Stevens, N. 1997 Friendships and adaptation in the life course. *Psychological Bulletin*, **121**, 355-370.
- Ide, J. K., Parkerson, J., Haertel, G. D., & Walberg, H. 1981 Peer group influence on educational outcomes: A Quantitative synthesis. *Journal of Educational Psychology*, **73**, 472-484.
- 今川民雄 1989 二者関係の発展 大坊郁夫・安藤清志・池田謙一(編) 個人から他者へ 誠信書房 Pp.333-360.
- Kandel, D. B. 1978 Homophily, selection, and socialization in adolescent friendships. *American Journal of Sociology*, **84**, 427-436.
- 古川雅文・小泉令三・浅川潔司 1992 小・中・高等学校を通じた移行 山本多喜司(編) 人生移行の発達心理学 北大路書房 Pp.152-178.
- 小泉令三 1992 中学校進学時における生徒の適応過程 教育心理学研究, **40**, 348-358.
- Kupersmidt, J. B., Coie, J. D., & Dodge, K. A. 1990 The role of poor peer relationships in the development of disorder. In S. R. Asher & J. D. Coie (Eds.), *Peer rejection in childhood*. New York: Cambridge University Press. Pp.274-305.
- Kupersmidt, J. B., DeRosier, M. E., & Patterson, C. P. 1995 Similarity as the basis for children's friendships: The roles of sociometric status, aggressive and achievement and demographic characteristics. *Journal of Social and Personal Relationships*, **12**, 439-452.
- 大西佐一・松山安雄(編) 1967 SMT・学級適応診断検査手引 日本文化科学社
- 岡安孝弘・嶋田洋徳・丹羽洋子・森俊夫・矢富直美 1992 中学生の学校ストレスの評価とストレス反応との関係 心理学研究, **63**, 310-318.
- 岡安孝弘・嶋田洋徳・坂野雄二 1993 中学生におけるソーシャル・サポートの学校ストレス軽減効果 教育心理学研究, **41**, 302-312.
- 松山安雄・倉智佐一 1969 学級におけるスクール・モラルに関する研究(第1報) 大阪教育大学紀要(第IV部門), **18**, 19-35.
- 松山安雄 1979 学級におけるスクール・モラルに関する研究(第3報): スクール・モラルと達成動機及び親の指導性との関係 大阪教育大学紀要(第IV部門), **28**, 19-28.
- 名城嗣明・石川清治・嘉数朝子 1986 小学校から中学校への移行期における児童の不安の縦断的研究(I) 琉球大学教育学部紀要(第2部), **29**, 355-362.
- 耳塚寛明・荻谷剛彦・濱名陽子・庄健二 1983 小・中学校における学校生活の変容過程に関する継時的研究(I) 東京大学教育学部紀要, **23**, 77-110.
- 中里浩・井上徹・田中国夫 1975 性格類似性と対人魅力: 向性と欲求の次元 心理学研究, **46**, 109-117.
- Newcomb, A. F., & Bagwell, C. L. 1995 Children's friendship relations: A meta-analytic review. *Psychological Bulletin*, **117**, 306-347.
- Parker, J. G., & Asher, S. R. 1993 Friendship and friendship quality in middle childhood: Links with group acceptance and feelings of loneliness and social dissatisfaction. *Developmental Psychology*, **29**, 611-621.
- Rubin, K. H., Bukowski, W., & Parker, J. G. 1998 Peer interactions, relationships, and groups. In W. Damon (Ed.), *Handbook of child psychology 5th ed.* New York: Wiley. Pp.619-700.

Simmons, R. G., & Blyth, D. A. 1987 *Moving into adolescence: The impact of pubertal change and school context*. New York: Aldine.

Urberg, K. A., Degirmencioglu, S. M., & Pilgrim, C. 1997 Close friend and adolescent cigarette smoking and alcohol use. *Developmental Psychology*, **33**, 834-844.

Wentzel, K. R., & Caldwell, K. 1997 Friendships, peer accep-

tance, and group membership: Relations to academic achievement in middle school. *Child Development*, **68**, 1198-1209.

Zimbardo, P. G. 1977 *Shyness: What it is, what to do about it*. Massachusetts: Addison-Wesley.

(平成17年9月21日受理)